

世間解

第三八五号

令和二年三月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―はなれずに― はなれずに―

三月であります。世情何かと騒がしい昨今であります。 “なもあみだぶつ” というお念仏さまがあつてくださって本当によかったと思ひます。

“なもあみだぶつ” というお念仏さまは私の中から、私の力を出てくるものではありません。阿弥陀さまがそのご本願のお徳とおはたらきのまま私に届いて私を揺り動かす私の口から出て私の耳に届いてくださっている。阿弥陀さまのおはたらきだからです。いつもお聞かせをいただくことであります。親鸞聖人が仰いでくださった阿弥陀さまの “なもあみだぶつ” は阿弥陀さまご自身が “なもあみだぶつ” という言葉となつて届き、私を包み支え育て続けてくださったという阿弥陀さまのおはたらきそのものであります。阿弥陀さまのおはたらきが常に先にあつてくださつておるのであります。私が出来て、何か分かつて、何か掴んで、その引き替えに阿弥陀さまのおはたらきが来てくださるのではないのであります。その阿弥陀さまのおはたらきは私がどんな風になつても決して変わることはないおはたらきであります。二月の下旬から西法寺に私が縁をいただきましたご法座を「中止させていただきます。」という数本のお電話をいただきました。新型コロナウイルスです。色々な影響が各地、各方面に出ている。現時点ではまだどういふ形で終熄に向かうのかは分かりません。一刻も早い収まりを願うばかりであります。親鸞聖人はその九十年のご生涯の中で何度か大きな飢饉に遭遇されています。早天や大雨、地震、冷害などがその大きな原因となりますが、飢饉は同時に疫病が流行いたします。親鸞聖人が越後への流罪が赦免となり、関東へ向かわれようとしていた途中も大飢饉の最中でした。恵信尼さまという親鸞聖人のご内室さまがその時の様子をお伝えてくださっています。それは親鸞聖人が四十二歳の建保二年（一一二四）のことでありました。

三部経、げにげにしく千部よまんと候ひしことは、信蓮房の四つの歳、武蔵の国やらん、上野の国やらん、佐貫と申すところにて、よみはじめ、四日ばかりありて、思ひかへして、よませたまはで、常陸へはおはしまし候ひしなり。

こんなお言葉ですが、飢饉で周りにじゆうが悲惨な状態になつてゐる “僧侶として自分に何か出来ることはないか” そう思われた親鸞聖人は浄土三部経を千回読もうと決意されます。 “お経を読む功德でせめて少しでもこの悲惨な状況がなんとかなれば…” とお考えになられたのでしよう。どこかのお堂に籠もられたのでしよう。しかし、四五日ほどして親鸞聖人はお経を読むことをスパッとやめてまた旅を続けられた…。 というのです。比叡山の行者であつた親鸞聖人が經典読誦を決意されたということは必ず阿弥陀さまにお約束をされた上での行いであつたはずで、それをスパッとやめることが出来た。そこに親鸞聖人の信仰を味わわせていただくことが出来ます。自分が經典を読誦することによってその功德で少しでも困つてゐる人々が安らかになるようにという思いでお経を読まれていた親鸞聖人。それは自分がお経を読むという行いの引き替えに人々に利益を与えてもらおうというその意味では尊い行いであつたでしょう。しかし、法然聖人から受け伝えられた阿弥陀さまのご本願のおはたらきはそうではありませんでした。私の何かの引き替えに阿弥陀さまの功德をいただくのではない。阿弥陀さまの私を願ひ支え育ててくださつてゐるおはたらきは常に私の思いより先にあつてくださった。今こうしてお経を御拝読することが出来るのもそういう阿弥陀さまのご本願のおはたらきであつた。そうお気づきになられたに違いありません。縁の中で私たちはさまざまな出来事にあい色んな思いを持つてゆかねばなりません。しかし、私がどんな風になろうとも、たとえ自分を取り巻く環境がどうであろうとも、阿弥陀さまの御往生くださつたかたの “必ず支えてるよ” というご本願のおはたらきは決して変わらぬ私を支え続けてくださつておるのであります。だから私は時々ではあるけれどもお念仏することが出来ておるのであります。阿弥陀さまやご往生生くださった方々がいつも一緒に居つてくださるのであります。